



目次

特集	〈外国にルーツを持つ子どもたちの今！〉 子どもたちの明日のために 中山真理子.....1
寄稿	医療通訳—医療者と患者の「文化の架け橋」 田中奈美.....2
世界の国から	ブルガリア エヴゲニー・カンディラロフ.....3
紙上講座	「学び方・習い方のひとさまざま」 金子広幸.....4,5

特集	〈外国にルーツを持つ子どもたちの今！〉 NPO IWC 国際市民の会 松村恵己.....6 町田にほんごスクールネット 丸山昌吾.....7
Information	「秋の研修会」報告
コラム	「帰国子女の会フレンズ」を立ち上げた頃のこと 渡辺紀子...8



特集

外国にルーツを持つ子どもたちの今！

子どもたちの明日のために

NPO 法人多文化子ども自立支援センター

代表理事 中山 真理子



早い時は、朝8時から、遅い時は、夜10時まで、土曜日
も日曜日も祝日もなく、学習者が入れ替わり、学びに来る場
所が自立支援センターです。学ぶ意志があればそれを可能
にし、機会を提供するのがセンターの第一の優先機能です。

一番の年少学習者は現在、小学校3年生。中学生、高校
生、それに中学既卒生、高校既卒生等、それぞれの目標の
ために頑張って学習に取り組んでいます。学習者に明確な
目標があればそれに即して、無い場合は一緒に考え、調べ、
出向き、確固たる目標を固め、それを可能にする、様々な
方法や資格試験などの情報を与え、それに向け実質的な支
援を行います。

これを支えるのは現在日本語を中心に（14人）、英語（2
人）、数学・算数（5人）、理科（1人）、社会（1人）の指
導者達です。複数の教科を教えている指導者もいて、総勢
17人の陣容となります。日本語は教室での同じレベルへの
一斉授業でなく、指導員が個々の学習者の個性・国籍・基
礎語・年齢・発達段階・問題点などを把握し、それに対応
して個別に指導する、少人数グループでの個別指導方式で
す。大きいお兄さん・お姉さんに交って小学生が学ぶとい
う微笑ましい光景が展開しますが、その形の中で年少者が
自然に多くのことを学びます。

日本語をとにかく集中して学び、初級の2/3程度まで進
み、ある程度日本語ができるようになると、数学（算数）・
英語を並行して教え始め、更に初級終了を目途に理科・社
会へと進みます。教科指導は英語を除き、高校進学支援ま

ででしたが、今年度からは大学進学支援レベルまでにする
ことができました。

将来の自立のためにどんなことがこの先起こるか、どん
なことをしていかなければいけないかを常に話題に乗せ、中
学生の早い段階から、高校時代に、最低N2、大学進学を
目指すのならできればN1を、同様に英検準1を獲得する
ことを繰り返し、話します。このお蔭か入学後も、引き続
き高校生が日本語等を学習し、成果物として立派にN2を
クリアしていくようになりました。

特に家族滞在ビザの子どもの場合は高校の始めから高校
卒業後の話を繰り返し、就労ビザに辿り着けるような道筋
を説明し、分野は自分で選択肢の中から選び取らせ、成就
のための支援を継続的に行います。高校卒業後、企業の内
定が取れなくなって初めてビザの問題を理解した場合でも、
失敗とさせずに、空白の1年間のアルバイト代で、自己の
先行投資先の専門学校・大学の入学資金に充てるべく貯金
をするように指導します。

自立して日本社会のパートナーとなる子ども達に十分な
資金が無い場合には、大学・短期大学・専門学校の学費の
一部に充てられる奨学金制度も作りました。日本は少子化
が進み、国外からの若い力が必要不可欠です。日本の社会
で生きていくことを選んでくれた子ども達に、結果的にで
も何もしないで放り出してしまうことはできません。弱小
組織で小さいことしかできませんが、これからも目的遂行
のための事業・活動を行って参ります。

医療通訳—医療者と患者の 「文化の架け橋」

寄稿

田中 奈美

順天堂大学大学院医学研究科修士課程

私は以前、中国にいたとき、体調をくずして現地の総合病院に行ったことがあります。中国語は多少わかりますが、看護師さんは早口で聞き取れず、ようやくたどり着いた診察室では、診察中でもほかの患者さんが次々になだれ込み、カルチャーギャップと言葉の壁に呆然としました。その後、日本に戻り、東京で知り合った中国人から、日本語があまり得意ではなく、日本の病院に行くのは大変だったという話を聞き、改めて外国で病院に行くことの難しさを感じました。こうした経験から医療通訳に興味を持ち、現在、順天堂大学大学院で医療通訳を学んでいます。今年4月、私が所属する研究室の医療通訳に関するアンケート調査で、TNVNの皆様にも多大なるお力添えをいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

日本では近年、医療通訳の必要性が高まっています。背景の一つは、在留および訪日外国人の増加です。在留外国人は2015年末の約223万人から、2021年末には約277万人に増加しました。また、2019年の訪日外国人は3188万人にのぼり、今後、海外との往来が正常化すれば、さらなる増加が見込まれます。

厚生労働省による令和3年度「医療機関における外国人患者の受入に係る実態調査」では全国5138の病院のうち、約9.5割で外国人患者の受入れ実績があったことが報告されました。外国人患者とのコミュニケーション問題も多く、日本を旅行中の外国人妊婦さんが

急に赤ちゃんが生まれそうになったり、留学に来てまもない学生が突然重病にかかるなどということもあったそうです。

大病院では医療通訳を配置しているところもありますし、大病院でなくても電話通訳サービスを導入しているところもあります。しかし数は多くなく、対応できる言語も限定的です。また、MICかながわのように、医療機関や行政と連携して、有償の医療通訳ボランティアを派遣している団体もあるものの、全国的にはやはりとても少ないです。

そもそも、なぜ医療通訳が必要なのでしょう。一つは、誤訳の問題です。患者と医師の言葉を双方に正確に伝えるためには、医療知識が必要となります。また、カルチャーギャップによるトラブルも発生しやすく、このため医療通訳は、患者の文化・習慣に関する知識も持ち、医療者と患者の「文化の架け橋」を担うことを求められます。

従来、医療通訳になるには、通訳学校や医療ツーリズム企業などが開催する養成コースに通うという方法がありました。しかし、医療通訳の質が担保されているとはかぎりません。そこで、厚生省は外国人患者の受入れ環境整備の一環として、医療通訳育成カリキュラム基準を制定し、医療通訳の認証制度を設け、医療通訳の質の向上を図っています。現在は通訳学校や大学などでこの基準に沿った養成コースを開設しています。順天堂大学はその一校です。

ただ、課題も山積しています。せっかく認証資格を取得しても、病院での募集は多くありませんし、電話通訳会社や医療ツーリズム企業も限られ、雇用形態はフリーランスということも多いです。また、ボランティアでは無報酬や低報酬になりがちという話も聞きます。結局、誰が医療通訳の費用を負担するかという問題は重要で、制度としてはまだ萌芽の段階です。それでもこれは、日本が多文化共生社会を推進する上で欠かせない課題でもあり、今後さらに、医療通訳の必要性は高まるのではないかと考えています。



病院実習の一環で系列病院を訪問
教員とコース一期生（筆者、右から2番目）



スラヴ文字・文学・文化の発祥地 ブルガリア

明治大学客員研究員
エヴゲニー・カネディラロフ
LTC友の会(杉並区)

〈ヨーグルトの国〉

「ブルガリアから来ました」と私が日本人に言うと、「ああ、ヨーグルトが有名ですね」とか「琴欧州の出身国ですね」という返事が返ってきます。確かに、M社がブルガリアヨーグルトを売り出しています。そのヨーグルトを食べたら、まさしくブルガリアの味だったので、びっくりしました。それもそのはず、M社は50年前からブルガリアヨーグルトの種を買い付けて製造しているのですから。でも、私は日本人が甘い味のヨーグルトが好きなのは、と思っていました。スーパーのヨーグルト売り場にはたくさん甘いタイプのヨーグルト製品が並んでいますね。ブルガリア人はプレーンタイプのヨーグルトか、「airyan」(アイリヤン)という、塩で味付けをした飲むタイプのヨーグルトが好きです。ブルガリアにいる日本人が、甘いと思って飲んだらしょっぱいのには驚いていました。日本の飲むヨーグルトはたいてい甘いですよ。

ブルガリアの夏に人気の冷製スープがありますが、ヨーグルトときゅうりに塩、ガーリック、ディルウード、オリーブオイル、砕いたクルミで味付けをします。私が大好きな料理の一つで、日本でも家族のためによく作っています。

〈琴欧州の国〉

琴欧州といえば、私は彼に2回会ったことがあります。初めは17年前で、力士として最も活躍していた頃です。ヨーロッパ出身初、外国人力士として5人目の大関です。当時、私はソフィア大学院生で博士論文執筆のために日本で資料集めをしていて、在東京ブルガリア大使館の建物に住んでいました。ある晩、琴欧州が大使館主催のパーティーに招待されて、その席で初めて会いました。まず2メートル以上の背の高さに驚きました。穏やかで静かな話しぶりでしたが、常にニコニコしてユーモアのセンスもありました。二度目に会ったのは3年前のブルガリアで、琴欧州はM社のヨーグルトのCM制作に参加していたのです。その時、出版されたばかりの私の著書を



著書を抱えた筆者



首都ソフィアの風景

渡しました。それはブルガリアと日本の関係史の本で、琴欧州に関してもページを割いて書きました。力士としての更なる栄達を願い、ブルガリアの若者にも刺激になるようにと言葉を添えて献呈したのです。

〈歴史〉

さて、ブルガリアの歴史は7世紀に遡り、ヨーロッパでは最も古い国の一つでもあります。ブルガリアには、歴史上でも自然や宗教、芸術の分野でも見るべき場所が様々あります。ブルガリア全土にはローマ帝国時代、ビザンティン帝国時代、そして14世紀のオスマン帝国時代の遺跡が多くあります。独立国となるのは19世紀後半です。そこから現代ブルガリアとしての歴史が始まります。

〈自然と風景〉

ブルガリアは日本と同じく自然が豊かで、多くの美しい山々があります。黒海の海岸線には美しいビーチがあり、山岳地方にはしゃれた教会や冬季リゾート施設があり、各地の都市や町には種々の建築物が織りなす独特の風景があります。

〈ブルガリア語〉

ブルガリア語はヨーロッパの中でも今日まで受け継がれた最も古い言語の一つで、南スラヴ語群の一つです。ブルガリアはキリル文字(紀元前890年代に作られた)誕生の地であり、ブルガリア語はキリル文字を100%使用する言語です。

〈日本とブルガリア〉

110年以上の日本とブルガリア両国の関係史が私の研究テーマですが、地理的な距離と文化の違いにも関わらず、両国が経済面でも文化面でも親密な関係を築き、長きに渡って良好な関係を継続できているのは驚異的です。その秘密は両国の豊かな文化と伝統にあると思います。それ無くしては二つの国の友好関係はあり得ません。

「学び方・習い方の ひとそれぞれ」

日本語教師 金子広幸

紙上講座

今号は、私たちがどんなふうに言語を学んできたのか、たどってみることにしましょう。

私の古い記憶をたどってみると、周りの大人の日本語を観察しながら真似していた瞬間があった気がします。子供は、語法の間違いなどを繰り返しながら主に「意味的なまとまりのあるフレーズ」を積み重ねていって、覚えてきたのではないのでしょうか。まさか「5段活用がどうの…」と習った人はいませんね。

それでは、英語はどうだったでしょう。

最初に中学で英語を学んだときには「BE動詞」「三単現のS」「複数形のS」「不規則動詞」「不定詞」「動名詞」「過去形・過去分詞」などと文法の言葉がたくさん出てきました。

母語である日本語とは異なる方法で、抽象化された情報知識をあてがわれながら、英語を学んでいたのですね。

私は中学1年の時、東京から静岡に転校しました。転校した初日の英語のクラスで「サンタンゲンのエス」

と聞いたのですが、まるでちんぷんかんぷんでした。大人になってフランス語を独学するときに、英語がフランス語と似ているのだと気づいて「サンタンゲン」の意味がわかりました。…私の英語はその辺で止まっているかもしれません。

でも、英語でプレゼンテーションしたり、学生と英語で話すようになってからは、積み上げてきた文法知識から「解放された」のか、「どうやら通じるか」とか「この状況ではこう言うのだ」と意識しながら、表現してきたように思います。

もうひとつ、この連載で話題にしている中国語です。大人になってからブラッシュアップした中国語は、文法も多少は学んだものの、台湾や中国で出会った環境で、周囲を観察させてもらいながら、たくさんの人に助けてもらって、便利な表現や言葉、そして発音・語法・文法を、身に付けたように思います。

師範大学のクラスで、中国の古代の長詩（正式には楽府（がふ）と言います）「木蘭辞（もくらんのじ）」を覚えて朗読する課題が出ました。20年以上前ディズニーのアニメーション「ムーラン」の原作となったものです。誰もが知っているその詩の内容を考えたり、表現を覚えていくことに夢中になりました。文法そのものよりも、歌のように韻を踏んで読めることのほうに興味が向き、楽しく覚えられたものでした。

そして、それと並行して日本語教師になっていった金子。

学習者に向き合う時、「その学習者の学び方・習い方」がどうあるべきなのかをことあるごとに考えるようになりました。

今、改めて迷っていることがあります。

文法を積み上げていくことで、その先に成功があるのか、それとも、表現やフレーズを積み重ねていくことで、その先に成功があるのか、です。

答えの出ない迷いですが、最近とみに迷うようになり、わからなくなることもあります。人によっては、英語などの外国語のチャレンジの後に日本語世界に入ってくる人もいて、個々人の経験による違いもずいぶんありますね。

私が30年以上前に日本語教師になった頃は、文法や語彙を一つ一つ積み上げていくとその先に成功があると信じられていた時代でした。

地域支援の場所でも、それが主流だった時代がありましたが、文法や語法以外のことも扱うようになってきました。やがて交流支援が主流となり、「正しい日本語」よりも「通じる日本語」にも存在意義が認められるようになったこともあると思います。

4年前から関わっているNHKの番組では、文法に関する説明は番組中ではほとんど出てきません。そのかわり映像で与えられる状況では「こういう表現・フレーズを使うといいですよ」とアイディアが示され、学習者を成功に導いていきます。

「え？これ覚えるだけ？文法はどうするの？」とどこかでつぶやいている私がいいます。

もともと文法の世界とは一定の距離を置いていた私が、日本語教師になる段階で文法・語法の洗礼を浴びたわけなのですが、その30年後周りの状況を見て不安になっているのかも知れません。

私の身の回りの学習者を眺めてみることにしましょう。

映像などに気軽に触れられる若者たちは、状況把握力が高く、例えば有名なアニメーションの名場面のセリフは1字も違わず丸覚えしていて、文法や語法などを意識することはないように見えます。でも、頭の中に蓄積ができて初めて、文法を使って整理を始める人もいます。

また、高い日本語運用能力を持っていて、スピーチや簡単な学術発表などにチャレンジしている大学院生は、「発表を始めさせていただきます」、「次の話題に移らせていただきます」、…「では発表を終わらせていただきます」とスラスラと言えるのに、肝心の使役の文法はまるで把握していない人もいます。「母は妹にピアノを習わせます」と言いたかったのに「母は妹がピアノにナラセます」と言ったり、「意見を言わせてください」というべきところをとっさに「言ワセテください」と言っていたり…。

また、ほぼネイティブと同じ日本語能力を持っている人でも、敬語を使っただけで「私は昔から日本語を使っただけじゃありません」と言っている人もいて、金子は教室で転びそうになりました。

…手伝う者として私はどうあるべきなのか…、また、立ち返って、そもそも人は一体どのようにして言葉を

覚えていくのでしょうか。

母語話者が日本語を覚えていくときには、自然な状況の中で、フレーズを覚えていくのであって文法的な知識を意識することはありません。

また、私の英語のように文法・語法から学んだ世代でも、ある瞬間にそこから離れて、状況に応じたフレーズで覚えていくようになる場合もあります。特に私の場合は、文法を意識しなくなった途端に話せるようになったような気がします。

中国語は話せるようになってから文法で改めて確認した経緯があります。最近ラジオ番組で中国語を話すようになってから、学習の初期の段階において身につけた知識の方が頼りにならないこともよくわかりました。とにかく言い習わしていると、正確な発音を忘れてしまうし、どこかで聞きかじった不正確な表現を身につけてしまっていることもあるのです。

では、「学び方・習い方」という視点から、改めて、学習者を見てみましょう。世界で出会った、日本語学習者は、いろいろな学び方・習い方をしていることがわかります。

流暢に日本語を話す人に理由を聞いてみると「私は毎晩日本語のカラオケで練習しているから」と答えました。

文字が一切書けないのに、よく話せる人に理由を聞いてみると「僕たちの国では宗教の言葉を文字を介さず丸のまま覚えさせられるので、それと同じ要領で学んだんですよ」と答えました。

また、日本語教師の私でさえ舌を巻いてしまうほど、文法の権化（ごんげ）、語法の鬼になっている学習者もいますが、その人は話すのも聞くのも上手でなかったりします。

きっとここから先は専門分野の研究の範囲ですね。母語習得・第二言語習得という分野の学問のお話です。…専門家にお願いしよっと。

あれれ～。このお話の落としどころありませんね～。

でも、この原稿を書いているうちに、1つ気がついたことがあります。「学び方・習い方」は、人によって違って、それぞれあっていいはずですね。

となったら、私たち日本語教師や、地域で日本語支援をおこなっている皆さんはどんな態度で臨んだらいいのでしょうか。

やっぱり学習者の日本語の「学び方・習い方」を観察すること集約していくのではないのでしょうか。

どう教えるかばかり追求していると、個々の学習者の学び方・習い方の違いをだんだん無視していくことになります。

その点、少し余裕を持って、個々の学習者がどう習っていくかを常に気にしていると、自然と教え方も決まってくるのではないのでしょうか。

今は日本中に私の講演を聞いてくださる方が増えてきましたが、「日本語の教え方を教えてください」という視点ではなく、「こんな習い方をする学習者がいるんですが、どう接したらいいでしょうか」と話題にできたらいいですね。

個々の学び方・習い方に柔軟に対応できることが、地域の日本語支援の場所ではきっと役に立つはずですから。



IWCの「子どもの支援」

NPO法人『IWC国際市民の会』

顧問 松村 恵已（『補習教室』担当）

『にほんごを習いたい』という電話が、9月に入り多くなり、事務局はその対応に朝から大忙しの状態が続いています。それというのも、IWCには「日本語」を教える教室が4つあるからです。

大人を対象にした『成人日本語教室』、自国で中学を卒業した既卒などの生徒を対象に、高校進学を目標にした『高校入試支援教室』、品川区の小・中学校に通っている児童、生徒を対象に支援をしている『JSL教室』、もう一つが『補習教室』です。今回は、『補習教室』について紹介させていただきます。

『補習教室』は、中学、高校に通っている生徒を対象に、その生徒の不足しているところを補い、学校の授業についていけるようにすることを目標に支援しています。通常は、日本語と国語を中心に、生徒のレベルに合わせて学習し、日本語の基礎から学び直します。小学校の教科書「ことばのきまり」は、最も手短かに無駄なく使える教材だと思い、取り入れています。

中学生は、定期試験に合わせて数学・英語・理科等を希望する生徒がいて、『高校入試支援教室』で教科を担当している先生に授業をお願いすることで、理解を深め、成績アップに繋がっています。

高校生の『補習教室』は、主に2つの分野の補習があります。1つ目は、在京外国人枠で高校に入学した生徒に起きやすいことを、解決していく補習授業です。彼らは、入学後1年次に、在籍高校で日本語の支援を受けることができます。しかしながら翌2年次には、一般受験で入学した生徒と共に、同じ国語の授業を受けることになります。この、同じ国語の授業を受け、理解し、更に試験で点数を取っていくことが、彼らには中々難しいのです。そのため、IWCでの補習を希望する生徒が増えています。

2つ目は、JLPT取得のための勉強です。将来のことを踏まえ、このJLPTの資格取得希望者が増加しています。生徒は、日々学校で日本語を聞いて勉強しているので、『聴解』問題は、皆高得点で通過します。しかし、特に漢字圏以外の生徒にとっては、N2の漢字の習得は容易ではありません。また、漢字圏の生徒の「濁音・長音」の発音を正すことも合格への道に繋がります。生徒に興味を持たせる

には工夫が必要ですが、最後は本人の「やる気」を信じてゴールを目指し、二人三脚で頑張っていきます。

秋期に『補習教室』で力を入れているのは、学校説明会等で奮起し、翌春の受験を希望して入会してくる生徒を、どのように合格に導くのか、ということです。3か月位しかない時間の中で、指導すべきことがたくさんあります。

面接試験対策も、その一つです。「自己PRカード」の作成や、作文を書くために、本人の個人的な体験談をまとめていきます。IWCでは、日本語を直接法で教えているので、生徒が理解するのに時間がかかります。そういう時、頼りになるのがボランティアで来てくれる、IWCの卒業生です。同じ道を経験した彼らは、中国語や英語、ネパール語等を使って助けてくれます。

面接のトレーニングは、マナー授業を担当している先生と一緒に、模擬面接を何度も繰り返します。面接は、生徒にとっては初めての体験で、所作と形式を覚えることは、座学とは異なる勉強のようで、皆喜んで練習しています。

IWCでは「一に挨拶、二に挨拶」をモットーに、勉強だけではなく、日本のマナーやルールも実体験の中で教え、立派な社会人になることを目指し、生徒に寄り添う学習指導を心がけています。困った時は「お互いさま」という“each other”の精神で、今年も生徒を無事に送り出したいと願っています。



教室風景

「町田にほんごスクールネット」について

町田にほんごスクールネット

会長 丸山 昌吾

「町田にほんごスクールネット」の会員数は、現在（2022年）43名で、2つの活動をしています。1つは市の教育委員会からの依頼を受けて日本語を十分理解していない小・中学生に日本語の指導を行うこと（学校支援）、他の1つは学校支援をしている学習者の中で更に学習をしたいという中学生の希望者に土曜日の午後2時間学習の支援をする（中学生教室）という活動です。ここではそれぞれの活動について報告いたします。

（1）学校支援

町田市では、以前は小・中学校に「日本語を十分理解していない小・中学生」が転入してくると、学校長や教育委員会がボランティア協会などを通して個々に指導者を探していましたが、2005年指導者が集まり「町田にほんごスクールネット」を組織しました。以後、「日本語を十分理解していない小・中学生」が転入してくると、学校長から教育委員会を通してスクールネットに依頼があり、会員の中から諸条件を考慮して指導者を決め、指導に当たるようにしています。町田には一般の学習者に日本語を指導している組織が大きなもので3つあります。初めの頃はその3つの組織のメンバーがほとんどでしたが（20～30人）、現在は組織以外の人も会員になっています。依頼される子どもは、学年も日本語の理解の仕方も多岐にわたっているため、指導時間や指導内容など学校とよく相談しながら進めています。

指導は、日本語の指導のみに限られており、1日2単位時間、週2回、年間100時間以内という枠で（2022年度）、ほとんどが国語、社会等の授業時に別室で日本語の学習をする形で行われています。なお指導費が1時間1100円市から支給されています（交通費はありません）。転入してくる子どもたちは、日本の友達との簡単な会話はすぐできるようになりますが、授業に関してはほとんど理解できず、授業中はただぼーっとしていることが多いようです。また、低学年では、2単位時間連続で日本語ということは難しく1単位時間しか指導できないことが多いです。

学習者はここ数年増加してきて、一昨年度の59人、昨年度の61人に対して2022年は現在（9月末日）90人になっ

ています。これだけの学習者を実働30数人で指導に当たりますが、1人の指導者が2～3人を掛け持ちで受け持つことになり厳しいです。現在ボランティアを募集していますが、なかなか集まりません。教育委員会ともどもこの先を心配しています。

（2）中学生教室

「町田にほんごスクールネット」が発足して3年後、中学生を指導している会員の中から「高校入試」に対する心配の声が上がりました。特に2年生、3年生で転入してきて日本語も十分理解していない生徒が何人もいました。「少しでも力になれば」と有志数人が集まり、日本語だけでなく学校支援ではやっていない教科の支援も含め、土曜の午後1時～3時まで、希望する中学生を対象に学習を始めました。進路決定目前の3年生のみを対象にと考えましたが、中学生全体に広げて「中学生教室」としました。ただ、初めは学習する場所がなく、「町田市民フォーラム」内のあちらこちら空いている場所での学習でした。2～3年後に現在活動している「町田国際交流センター講習室」が定期的に借りられるようになり、学習者も多い時は15、6名、支援者が10名程度になりました。1対1の指導を原則に、支援内容も日本語指導だけでなく、作文、論文、数学、英語、面接等の支援（教えるのではなく、一緒に考える）等が行われ40人定員の部屋がほぼ満席になる状況でした。幸い毎年3～5名の3年生が全員高校進学できました。（それぞれ個人や学校の力が大きいことは言うまでもありません）

2年前、コロナウイルスの流行によって、会場の閉鎖、人数制限等により「中学生教室」は休止せざるを得なくなりました。2022年6月、「町田にほんごスクールネット」の有志8名で再発足し、学校支援での学習者で希望する生徒とともにスタートしました。学習者には中学3年生はいないので、小学校の高学年の児童も含めて現在5名の学習者が参加しています。また、学習内容はほとんどが基礎的な日本語の学習です。

●2022年度秋の研修会のご報告

昨年12月にTNVNでは初めてZoomによる研修会を実施しました。今年度も是非にと、リクエストを頂き、今年度はTNVN会員を対象にした「秋の研修会」を二回企画し実施しました。

1回目は10/27(木) 19-20:30までLTC友の会山形美保子さんのご協力で事例報告会を、2回目は11/09(水) 19-21時の枠で、長く紙上講座に執筆頂いている金子広幸さんによる講座を開きました。両回とも定員枠を昨年度の倍に増やしましたが、いずれも定員を超える方々にお申し込みをいただきました。

事例報告会は今回が初回で、対面でもオンラインでも使える活動例の報告の後、会員団体の皆さまの教室の様子もお聞きすることができました。今後も会員団体による事例報告の会を繋いでいけるよう願っています。

講座では、学習者の社会言語能力の獲得について、講師金子さんの大学授業を例に、教室活動の経緯を参加者も疑似体験しながら考えることができ、ボランティア現場にも活かせるヒントをたくさんいただきました。

ただ、研修会当日に欠席された方が両回とも複数いらっしゃったことは、講座担当として残念に思いました。

これからも、TNVN会員の皆さまの日頃の活動に役立つ研修会を企画して参りますので、どうぞ皆さま方からのお声をお聞かせください。

column

「帰国子女の会フレンズ」を立ち上げた頃のこと

フレンズは1983年10月に10数名の帰国子女の母親が集まり、代々木のワンルームマンションを借りてスタートしました。

海外での、また帰国後の体験を個人のものとして終わらせず、次に海外へ行く方々、帰国する方々と分かち合い、子供たちの教育、さらには社会の在り方などを共に考えたいと活動を始め、渡航前、海外滞在中、帰国後の相談に応じるようになりました。

当時は日本の学校のことを何も知らずに帰国した子供たちを暖かく迎え、海外での体験を評価し、適切な指導をしてくれる学校はごく少数でした。また、海外で身につけたものを活かさない日本の学校に適應できない「外国はがし」という考え方がありました。母国での適應に苦労する子供たちを通して、日本の教育の現状を知り、国際化の時代に逆行していると思いました。海外帰国子女が直面する諸問題は日本の教育、社会全体の問題です。異質なものを受け入れ、多様な価値観を認め、一人一人の個性が尊重される教育環境が広がることが求められます。

要望書をまとめ、文部大臣、東京都教

育長に直々に話を聞いていただき手渡すことができました。

とくに帰国生が苦労したのは高校受験です。そのためメンバーの母親たちが手分けして学校訪問をして高校の受け入れの現状を取材し、入学した帰国生の生の声を聴いてまとめ、約400頁の「高校案内—母親が歩いて見た学校案内」を作成、4000部出版しました。反響は大きく、マスコミにも取り上げられ、紀伊國屋のニューヨーク店ではベストセラーになったと聞いています。この「学校案内」は、現在も毎年出版しています。

望外なことに、活動を始めて3年半ほどして東京海上様から丸の内の本社ビルの一隅を事務所スペースとして使わせていただけることになり、活動の経済的、社会的基盤を固める事が出来ました。東京海上様にはその他にも同社大会議室でのシンポジウム開催等多大なご協力を頂き深く感謝しています。

また、経済企画庁国民生活審議会の委員に任命され、発言する機会も頂きました。今はフレンズの活動から退いていますが、根本的な問題の解決は遠く、現在のメンバーの皆さんの活躍を願っています。(渡辺紀子)



東京日本語ボランティア・ネットワーク(TNVN)は都内のボランティア日本語教室のネットワークで、会員からいただく会費で運営している民間の団体です。会員は日本語学習支援活動を通して、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人を、隣人として支援しています。又、TNVNは会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

◆日本語ボランティア相談窓口

日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフが応えます。メールでお問合せください。

*対面でのご相談にもお応えします。ご希望の方は、以下メールでご予約の上、おいでください。

日時：毎週金曜日午後2時～4時
(祭日休み)

場所：東京ボランティア・市民活動センター
JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線)出口B2b)
飯田橋駅下車
セントラルプラザビル 10Fロビー

◆郵送先

〒162-0823
東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス No.4

◆E-mail : office@tnvn.jp

◆URL : https://www.tnvn.jp/

◆郵便払込

口座番号：00100-1-719259
加入者名：東京日本語ボランティア・ネットワーク

◆会員数(2022年11月25日現在)

正会員：85団体
協力会員：14名
賛助会員：5団体

◆編集／大野 敏宏、岡田 美奈子、小野 美恵子、仁村 議子、林川 玲子、山内 眞理、渡辺 紀子

◆レイアウト／美巧社

ニュースレター読者の皆様、
117号は、いかがでしたか?
感想を是非こちらへ



アンケート